

攻撃を仕掛け、一揆の首謀者を捕縛し、あるいは人質を捕らえ、あるいは首を切り、郡山のうちの柳町五丁目というところに獄門にかけた。

これによって、ひとまず国内の大部分は鎮まった。そして籠城の話し合いがおこなわれ、部隊の配置を決めることとなった。皆は「とにかく、外曲輪を捨てて二の丸と三の丸を守るべきである」といったが、勘兵衛は受け入れなかった。話し合いは、しばらくの間外曲輪を守り、様子を見て、その上で内曲輪へ籠るのがよいであろうという形で決着した。

一方、郡山へ向かう軍勢は、筒井定次・藤堂高虎、その他二、三人が頭領に任命された。この軍勢は郡山より約一九・七キロメートル北にある山城国玉水というところまでやってきた。彼らは玉水に待機して郡山へ使者を送り、城を明け渡すよう迫ってきた。勘兵衛とその他の家臣は次のように返答した。

「城主である増田長盛は免罪されて直接高野山へ入ったとは聞いているが、留守役である我々家臣に対しては、長盛からは何も聞かされていないので、勝手に城を明け渡すことはできない。もし、軽率に領内に押し入ったならば戦が始まることになるであろう」

そして勘兵衛はいっそう持ち場を堅固なものにして城の守備態勢を整えた。攻め手側は使者を遣わし、主君である長盛を裏切って城を明け渡してはどうかと働きかけたものの、守備側はそれには答えず使者を追い返し、再びこのようなことがあるならば、使者をも斬り捨てるとの旨を言い渡した。大和国は元来筒井氏となじみが深い国であるので、筒井定次は策略をめぐらし、土着の人々を蜂起させ、夜中に郡山へ押し入り、略奪・放火などをおこなおうとした。これを勘兵衛は早速聞きつけて、軍勢二、三百人で出陣し、村人四、五十人を討伐あるいは捕縛し、全員の首を切つて獄門にかけた。その後、勘兵衛は一層嚴重に城の守りを固めた。攻め手もなす術がなく、進撃することもできなかった。この次第を高野山にいた長盛へ伝えたところ、長盛より高田小左衛門という者が郡山へ遣わされた。長盛からは「郡山城は間違いなく明け渡すべきである。これまでの振る舞いには満足している」という旨が、勘兵衛方へ自筆の書状をもって通知された。

そうして、勘兵衛達は評議の上、城を明け渡すことに決し、敵方へ使者を送り、次のような提案をおこなった。

「城を明け渡すにあたり、城内には多くの財